

5) 輦台渡し図 れんだいわたしす

(作者：小泉 檀山^{こいずみ だんざん}／江戸後期／縦 23.8×横 50.2cm)



長雨で水かさが増したため、輦台に乗って川を渡ることにし、しばし貴人の気分を味わったという場面を描いたもの。

[画中の歌]

「霖雨連々として渡津を絶つ
川波田々として流れ隔つこと新たなり
水神我を憐れんで輦に乗るを許す
暫時貴人と成るを得たるに似る」

【作者解説】小泉 檀山^{こいずみ だんざん あやる}（斐・1770～1854）

下野国（栃木県）益子の神職の家に生まれる。^{しまぎきうんぼ}島崎雲圃の弟子となり、本格的に絵を描くようになる。

50歳の時、黒羽藩主大関氏に抱えられるが、その後も作画活動を続けた。

【語句解説】扇（おうぎ）

扇子ともいう。扇は涼をとるための道具であるが、儀式にも用いられた。もとは団扇形式^{うちわ}のもので、そこから現在の折りたたみ形式の扇が生じたと考えられている。はじめヒノキの薄片をつなぎ合わせ^{ひおうぎ}た檜扇^{ひおうぎ}ができ、その後骨組みに紙を張った紙扇^{せんめん}ができたといわれている。江戸時代には民間でも普及し、客のある席上などで即席に絵を描く場合には扇面が多く用いられた。

◇協力者一覧(五十音順・敬称略)

上野友愛 加藤陽介 金田泰二 神田龍身 小林忠 佐野みどり マシュー・マッケルウェイ

2006年度 学習院大学史料館常設展

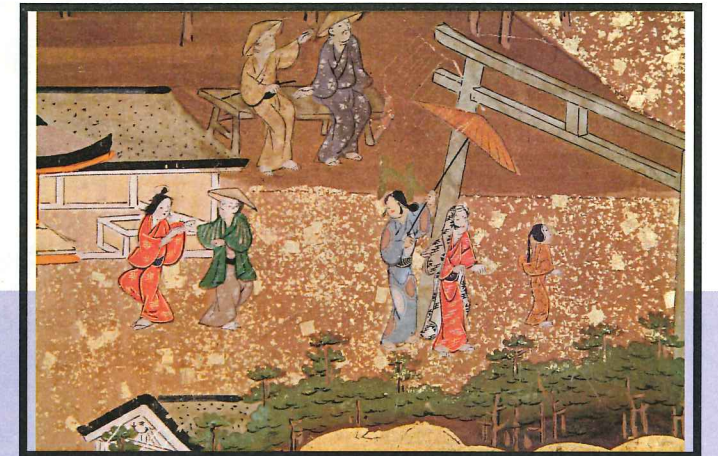
「描かれたメッセージ —いにしえの都物語・京の旅—」

会期：2006年10月2日(月)～12月14日(木)
月～金 12:00～17:00 土 10:00～12:00
日曜・祝日・開院記念日(10月17日)閉室

会場：学習院大学北2号館1階 史料館展示室



方広寺大仏殿(洛中洛外図小屏風・右隻)



祇園社門前の二軒茶屋(同・右隻)

2006年度 学習院大学史料館 常設展

「描かれたメッセージ —いにしえの都物語・京の旅—」

開催日時：2006年10月2日(月)～12月14日(木)

月～金曜日：12:00～17:00 土曜日：10:00～12:00

会場：学習院大学史料館展示室(北2号館1階) *入場無料



北野社(同・左隻)

描かれたメッセージ

—いにしえの都物語・京の旅—

学習院大学史料館には、13 万点をこえる史料が収蔵されています。それら多くの史料のうちから、今回はとくに絵画史料を中心に展示を行います。

絵画史料は、実感に富む反面、事実をそのまま伝えているかどうか判断が難しいのですが、そこに描かれた情景から、その時代に特有の美意識や価値観を推察することができます。

屏風や扇の画題として好まれた場所に“京の都”があります。

長きにわたって政治と文化の中心地であった京都は、政治や経済の中心が江戸に移っても、四季折々の風物とともに、旅の終着点として憧れをもって描かれていました。

都の各所で催される伝統的な年中行事は、信仰と深く結びついたもので、多くの人びとの心をとらえていました。

迫力ある絵画史料を鑑賞し、そこに描かれたメッセージに思いをめぐらせながら、往時への旅をお楽しみください。

2006 年 10 月

学習院大学史料館

1) 住吉物語屏風 すみよしものがたりびょうぶ

(作者不明／江戸前期／六曲一隻／縦 164.4cm×横 306cm)



住吉物語は、“^{すまや}継子いじめ”の民間説話が平安時代に仮名物語として成立したもの。作者不明。物語成立後に多くの手が加えられており、鎌倉時代には「改作本」や絵巻が登場している。本屏風は、元来草子であったものを、絵だけ屏風に貼り付けたもので、住吉物語の各場面が描かれたものである。

【画題解説】 住吉(すみよし)

「住吉」は現大阪市住吉区とその周辺一帯をさし、^{せつついちのみや}摂津一宮である住吉大社がある。住吉大社は、航海守護・国家鎮護・和歌・水利などの神として多くの崇敬を集め、平安時代には朝廷・貴族らの参詣も多かった。

【話のあらすじ】

母を失った美しい姫君の結婚や入内を、継母が様々な策により妨害する。さらに継母は、年若い男に姫君を盗ませようとするが、事情を察した姫君は、乳母子とともに住吉へ逃れる。かつての求婚者であった四位少将は姫君を忘れることができず、初瀬に参詣して夢で姫君の所在を知り、住吉へ下って姫君と再会。都へ戻った二人は幸福な結婚生活に入り、時を経て父とも再会。継母は人々にうとまれ、零落する。

2) 稚児玩犬図屏風 ちごがんけんずびょうぶ

(作者不明／江戸前期／八曲一隻／縦 119.2cm×横 388cm)



本屏風の左には橋の上にたたずむ「稚児」と御付の「童」の姿が描かれている。これは稚児の「瀬田橋」からの入水を語る『秋夜長物語』^{あきのよながものがたり}を想像させる。一方、右側には犬と戯れる「童」の姿が描かれており、現世と後世の対比が感じられる。

【画題解説】稚児(ちご)

稚児はもともと幼少の子どもをさし、多くは寺院に入った子どもに限って用いられた。中世社会では幼少の頃に寺院に入って教育を受ける者があり、成人し改めて僧となり、あるいは自家に帰った。稚児物語は中世の物語草子の一類で、稚児を主人公とする。『秋夜長物語』^{あきのよながものがたり}『あしびき』などが有名。

【話のあらすじ】

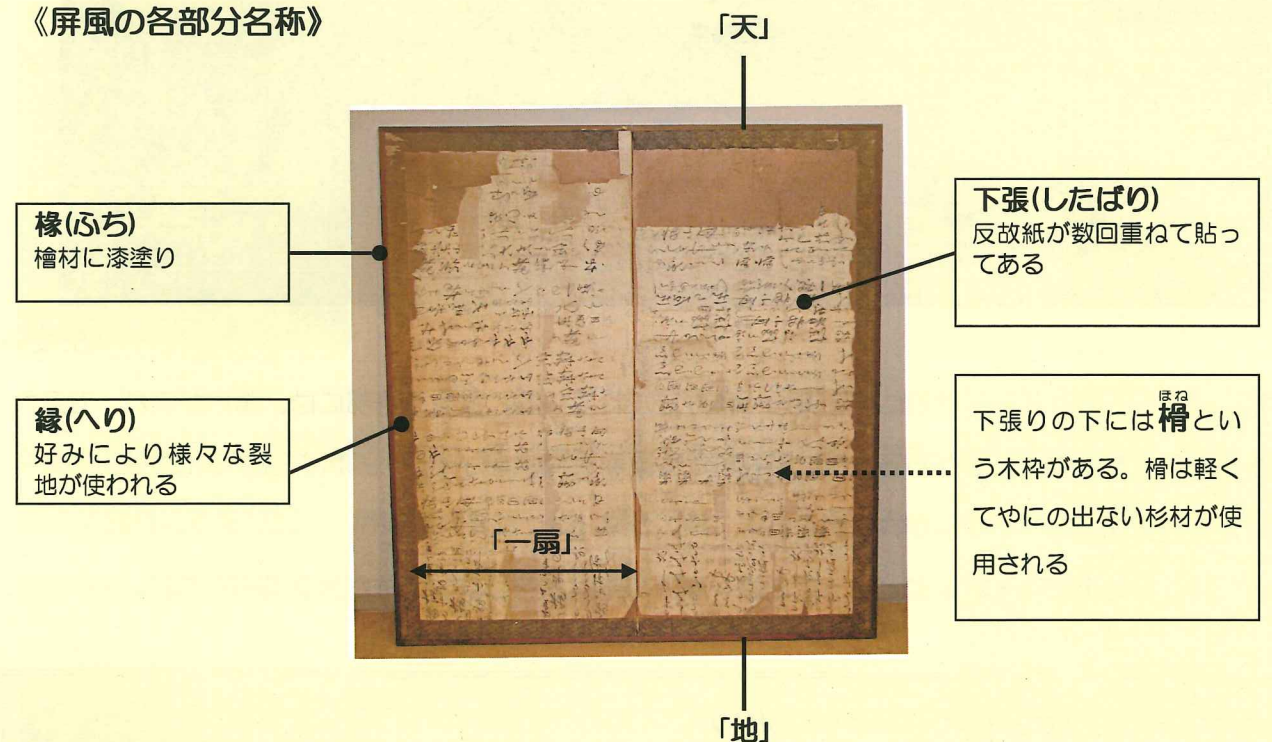
『秋夜長物語』^{あきのよながものがたり}は室町時代頃の成立とされ、作者不詳。話のあらすじは比叡山の僧桂海が、三井寺の稚児梅若に恋をする。三井寺と比叡山が抗争し、梅若は勢多で入水、桂海は発心する。『あしびき』は比叡山の僧と東大寺東南院の稚児の物語で、南都と叡山の抗争など様々な困苦を乗り越え、二人が結ばれる話。

■屏風とは■

本来は風をさえぎり、人目をさける、室内を間仕切る調度。絵画などをともなうことで室内装飾用ともなった。縦長の長方形の木枠に紙や布を張ったものが一扇^{せん}、これをつなぎ合わせ六扇、八扇などとし、折りたためるように作られている。一般的に、六曲一雙^{せき}(六扇のもの二つで一組)が基準で、六扇一点を六曲一隻という。

『日本書紀』には、屏風が7世紀後半に新羅から献上された記事がみられる。やがて国内で独自の発展をとげ、室町時代以来、海外へ盛んに輸出された。江戸時代には広く多くの人びとに用いられ、実用・美術用の両面から日本住宅になじみ深いものとなっている。

《屏風の各部分名称》



3) 洛中洛外図小屏風 らくちゅうらくがいずこびょうぶ

(作者：不明／江戸前期／六曲一双／縦 106 cm×横 281 cm)



(右隻)



(左隻)

右隻には三十三間堂から知恩院に至る東山一帯が描かれている。右隻の底部には、鴨川が流れ、五条大橋をわたると方広寺大仏殿がある。桜に彩られた豊国廟と清水寺が並び、八坂の塔から祇園社、歌舞伎小屋が立ち並ぶ四条河原が描かれている。

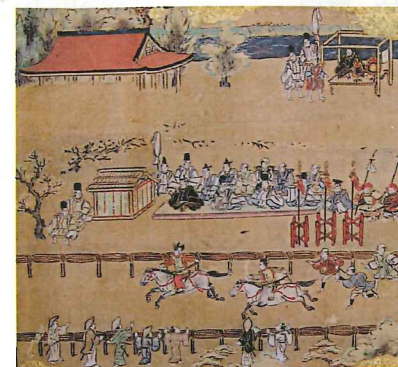
左隻には、秋の天龍寺・釈迦堂といった嵯峨・嵐山の寺院があり、北野社が大きく描かれる。

【画題解説】洛中洛外図(らくちゅうらくがいず)

室町時代に成立し、江戸時代にも製作が続けられた、京都の市中と郊外を描いた絵画。色紙や扇面などに描かれたものもあるが、六曲一双の屏風形式が一般的。京都の主要な建物・名所旧跡、都のなかで営まれる商業・手工業、さらに参詣者をはじめとするあらゆる人びとの姿を躍動的に描いている。

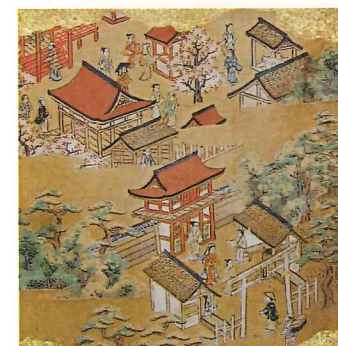
4) 洛中洛外図色紙 らくちゅうらくがいずしきし

(作者：不明／江戸前期／縦 21.2cm×横 18cm)



かもわけいかずち
□賀茂別雷神社(上賀茂神社)では5月に神事として競馬が行われる。
くらべうま
 早く走らせることよりも、いかに定められた範囲内で、相手の馬や乗
 尻の邪魔をして先着するかが競われた。

□音羽山清水寺 創建年代などは定かでないが、大和国の僧が清水の落ちる地に坂上田村麻呂の助勢を得て創設し、延暦24年(805)に田村麻呂が寺を整備したとされる。景勝の当寺は、平安貴族や庶民から信仰を集めた。舞台を有する本堂は寛永10年(1633)に再建された。



□祇園社(八坂神社)の創祀は、社伝によれば斉明天皇二年(656)といわれる。平安時代には疫病退治で崇敬を集め、中世には京都下京を中心に商家の信仰を集めた。

かもみおや
□賀茂御祖神社(下賀茂神社)では6月後半に御手洗会が行われ、境内の御手洗川に足をひたし、無病息災を祈った。現在では、7月土用の丑の日に社前の御手洗池で足をつける神事が行われている。



□吉田神社は、貞観年間(859~857)ころの創建で、京都市左京区吉田神楽岡町に鎮座する。八角形の斎場所大元宮には全国の神が祀られている。